教育空間創造ユニットの活動
― 京都府南山城村 野殿・童仙房地域での生涯教育の実践と研究 ―

1．円卓会議での発表内容

教育空間創造ユニットからは、「生涯教育の実践と研究のフィールドとしての野殿・童仙房」というタイトルで、2006年の相互協定にもとづいて発足した「野殿童仙房生涯学習推進委員会」の活動紹介を中心とする報告を行った。

①「野殿童仙房生涯学習推進委員会」の活動について

この活動は、統合による小学校の閉校がきっかけになった経緯もあり、行政や地縁組織に依存しない、個人参加の原則を重視してきた。住民にとって、「生涯学習」は「開拓と通じるもの」であり、学校に代わる地域の交流拠点を創造する意味をもっていた。一方大学にとって、この活動拠点は、「地域から学ぶ」ための格好のフィールドであり、「互酬性と対話性」を原則にした活動空間でもあった。

その生涯学習実践としての独自性は、ひと言でいえば感覚・身体性を通じた「ローカルな知」の発見にある。それは「体験と知」の関係を組み直し、フィールドからの課題発見とその解決を志向する「もうひとつの教育空間」を構築する試みである。そのため様々な「感覚」をフル活用することで「身体性」が発揮される学びの仕掛けが用意されてきた。

これまでに６回開催した「風と雲の広場」では、地域通貨「チャオ！」の広場、紙芝居口演、万華鏡づくり、「みんなの科学教室」（写真はその実験の様子）、「手づくり村・ミニのどう」など、多彩な活動が行われてきた。それらは、子どもとおとなの共同作業というかたちで、自分で「つくる・体験する」という学びの世界をつくりだしてきた。

また、大学・研究とのインターフェースとしてのセミナー・シンポジウムも地域内で開かれてきた。2009年には「学ぶ原理～リョウシ（漁師×猟師）さんからみた森・里・海のつながり」と題して、野殿区長を含む山の猟師と、カキの森を育てる海の漁師の対談が行われた。会場では山海の幸が振舞われ、自然と関わっていく知恵、「命」をいただく営み、森・里・海の密接な連環への気づきなどが語りあわれた。

2010年からは、住民からの提案で「野童いなか塾」が始まり、地域マップづくり・自然観察会・昔の遊び体験など、地域内外の人びとが地域を見つめ直し、魅力を発見する試みが行われている。2011年からは地元住民の交流と学びの場として「水曜ひろば」が始まり、「防災のつどい」を消防団とともに開催して、地域防災に向けた「談義」を開始した。

②調査・研究活動について

生涯教育実践と並行して、教育実践コラボレーション・センター、生涯教育学講座、「童仙房フィールド研究会」によるフィールド調査・研究活動も開始された。この活動には、専門領域を超えて、研究者・大学院生・社会人ゼミ生などが多数参加している。この調査において、住民との対話を通じた問題発見の作業へ進む過程で、調査者側の「前提」が問い直されることもしばしばである。「大学と地域」の共有する知を育てることの困難さを感じている。とりわけこの間、地域の人々の語りを聞き取るなかで、彼（彼女）らの「集合的記憶」を浮き彫りにする作業を重点的に行ってきた。これは、住民にとって「野殿・童仙房地域」とは何であるかを、インタビューを通じて自己認識してもらう作業でもある。修士課程修了後も現地調査を継続している徳島市立高校の生駒佳也氏からは、このような問題意識を共有しつつ、戦前、戦中の数奇な運命をたどった数人の入植者にスポットを当てた報告とその成果を高校での授業に結びつけた報告（「童仙房における記録と記憶－『生命性と有能性を育てる』授業づくり－」）が行われた。

2．参加者からのコメントと考察

前平先生からは、活動報告でも引用された「ローカルな知」について、自らつくり出した言葉としての説明があった。それは「局所的な知」すなわち「時間と空間に限定された知」を意味していること、そして「野殿童仙房」という限られた時・空間のなかで展開されてきた活動の中に、新しい教育空間を創造できるような「萌芽」が生まれていることが指摘された。また、地域活動の広報誌として年４回発行されている『風と雲の便り』は、そのネーミングのなかに「大学から地域へ」と「地域から大学へ」という知の双方向性を願う意味が込められていることが述べられた。

「野殿童仙房生涯学習推進委員会」からは、童仙房区の内藤浩哉氏の報告があり、雇用状況を含む中山間地の情勢が急激に深刻化している実態が明らかにされた。内藤氏は「地域の活性化」を求める声自体が消滅しかけていることを指摘したうえで、この難局に対して、自分たちが道を切り拓いていかないといけないことにあらためて気がついた、と述べた。

さらに「古いもの・個別のもの・具体的なもの」を突き詰めていくプロセスのなかで、学校で学習する「一般論」の適用を超えるために、「ローカルな知」をヒントにしていきたいと総括した。

3．おわりに

今後もフィールドに関与するものが、様々な意見をたたかわせながら、変容する地域社会のなかで、相互教育・自己教育としての生涯教育実践およびその研究活動をすすめていきたい。　（文責：辻　喜代司）